

「年頭法話」

本願寺富山別院輪番 仲尾信博

本願寺富山別院の輪番仲尾と申します。みなさまには、どのような年明けを迎えられましたでしょうか。こうして、私が新しい年を迎えることが出来ますのは、み仏と皆さまのおかげであると感謝いたしております。

今、年頭にあたり静かに年を振り返りますと、昨年も多く方とお出遇いさせていただきました。人生は出遇いであると申しますが、数々の出遇いを通して、多くの喜びやお力を頂きました。これからも出遇いを大切に致したいと思っております。さて、人生には喜びの出遇いとは正反対のことも存在します。それは別れであります。誰しも避けたいものですが、そうは行かないものがこの人生であります。その別れを大量に生み出してしまふ現象。それは戦争であります。今年は終戦70年を迎えます。大切な節目の年であります。

この節目の年の初めに当たり、私の輪番としての前任地でありました沖縄でのことを少しご紹介したいと思えます。私のおりました沖縄別院では2012年6月封切りました『ふじ学徒隊』という映画の作成協力をいたしました。その映画は、かつて第2次世界大戦時、沖縄戦において学徒看護隊として、暗い壕の中でうめく傷病兵の看護にあつた女学生の記録を綴った短編ドキュメンタリー映画です。その映画の主人公となった学生の学校の名前は積徳高等女学校と言います。その歴史を申しますとこの積徳高等女学校は、大正7年4月那覇市の大典寺という西本願寺の寺院の中で県の許可を得て創設されたことに始まります。大正15年には寺院の隣に校舎を新築し、さらに昭和4年には校舎1棟を増設し設備を拡充していきます。昭和7年には学校そのものが移転新築され、昭和16年には、先島諸島や離島からの入学生のために寄宿舎・寮も立てられました。昭和19年当時の学生数450名。しかし、校舎も寮もすべて戦争によって灰燼に帰してしまいました。

昭和20年、沖縄では学徒隊として有名な「ひめゆり学徒隊」など9つの女学校の生徒が動員され、その1つに積徳高等女学校も含まれています。積徳高等女学校は学校の校章が下り藤であったところから「ふじ学徒隊」と呼ばれました。女子学徒隊の任務は傷病兵の看護、手術の手伝い、水汲みや食料の受領、排泄物の処理、死体埋葬などあります。「ふじ学徒隊」は、2月よりの看護教育を受けましたが、戦況の悪化とともに数週間で中断され、豊見城市の野戦病院に配属されます。病院では、引切り無しに運ばれてくる負傷兵の手術。手や足を切断し、その切断した手や足、死体の処理も任務でありました。傷口からは蛆虫が湧き、膿や排泄物の臭い、負傷兵の叫び声。地獄さながらであったそうであります。さらに米軍の上陸により5月下旬、南部の糸洲の壕へと避難となります。詳しいことは映画に譲りますが、昭和20年6月23日、沖縄守備軍司令牛島中将の自決で沖縄での日本軍の組織的戦争は終結しました。6月26日ふじ学徒隊を指揮した隊長は学徒に向かって「決して死んではいけない。必ず生きて家族のもとに帰りなさい。そして悲惨な戦争の最後を、後の国民に伝えてくれ」と言って学徒隊を解散しました。しかし、その後も地獄は続きました。

昭和20年6月23日沖縄での組織的戦争は終了しましたが、その1カ月あまりの後、8月1日には、ここ富山市が戦火に包まれました。なぜ、僧侶である私が戦争を語るのか。戦争は悪いことであることぐらい誰でもわかります。しかし、戦争は無くなりません。仏教は、命を尊い存在としてじっくりと見て行きます。それは、数々のつながりの中でしか存在できない命であると見ます。人は一人では決して生きて行けない存在であります。命は共に支え合ふという関係性を持っています。その間関係性を強制的に断つて行くもの。かけがえのない存在を否定してゆくもの。それが戦争であります。それゆえ、お釈迦さまは「兵戈無用(ひょうがむよう)」と仏法の広まるころには兵士も武器も用いることのない世界の実現されると説かれました。

戦争が始まるまで、それぞれの9校の学校で生徒たちは精一杯学び、笑い語らつた校舎も母校そのものも、戦争とその後の占領政策で全てが消滅しました。地獄を見た。地獄を体験された方からの『生きる』という強いメッセージ。時間経過とともに忘却の彼方に追いやっていないか。多くの犠牲を強いられて上での静かに迎えることができたこのお正月であります。人間は、忘れる心、人を責める心、矛盾した存在であると仏教は教えてくれます。

新しい年が明けました。これからも仏教の教え、み仏のお心をいただいてこの1年、共に精一杯歩ませていただきたいと思います。